

186  
199

小野阿通

[Blank page]

186

199

山聖河通

はしき

須藤求馬氏

一 おづうは、女教師として、其功勞極めて多き女なり。

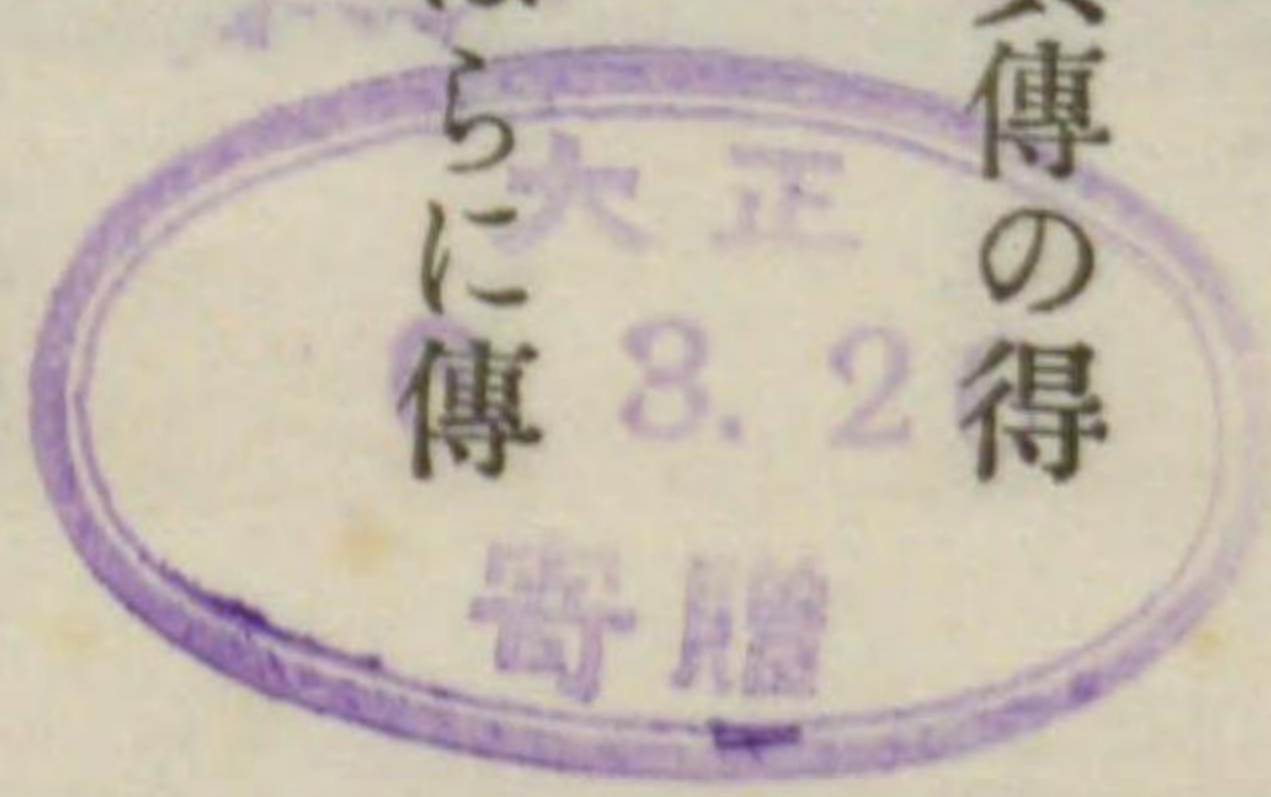
一 おづうは、文學者として、其功績極めて大なる女なり。

一 おづうは、世に其功勞尤も多く大なるにも似もやらず、其傳の得て詳にせる者、未だ之れあらざるなり。

一 おづうは、多く物の本に見ゆるにも拘らず、其事蹟をつはらに傳ふるものなきを、予はつねに憾みとする者なり。

一 此篇は、もと、近世女子教育史資料に供せんとして、嘗てものし置ける物の其一なる者なり。

一 此篇は、かつて、帝國文學記者の望に任せて、其社説欄中に掲げ



しめたる事もあり、こたみ増訂して本篇となす者なり。

一 予年久しく、おづうの眞蹟を得まく欲して曾て得られず、やうやくにして、此中之を獲たり、其喜び知ぬべし、因りて之れを篇中に收め卷の首に置ける者なり。

一 如上のゆるよしにて、爰に一の記念とし、印行して以て同臭の友に頒つ者なり。

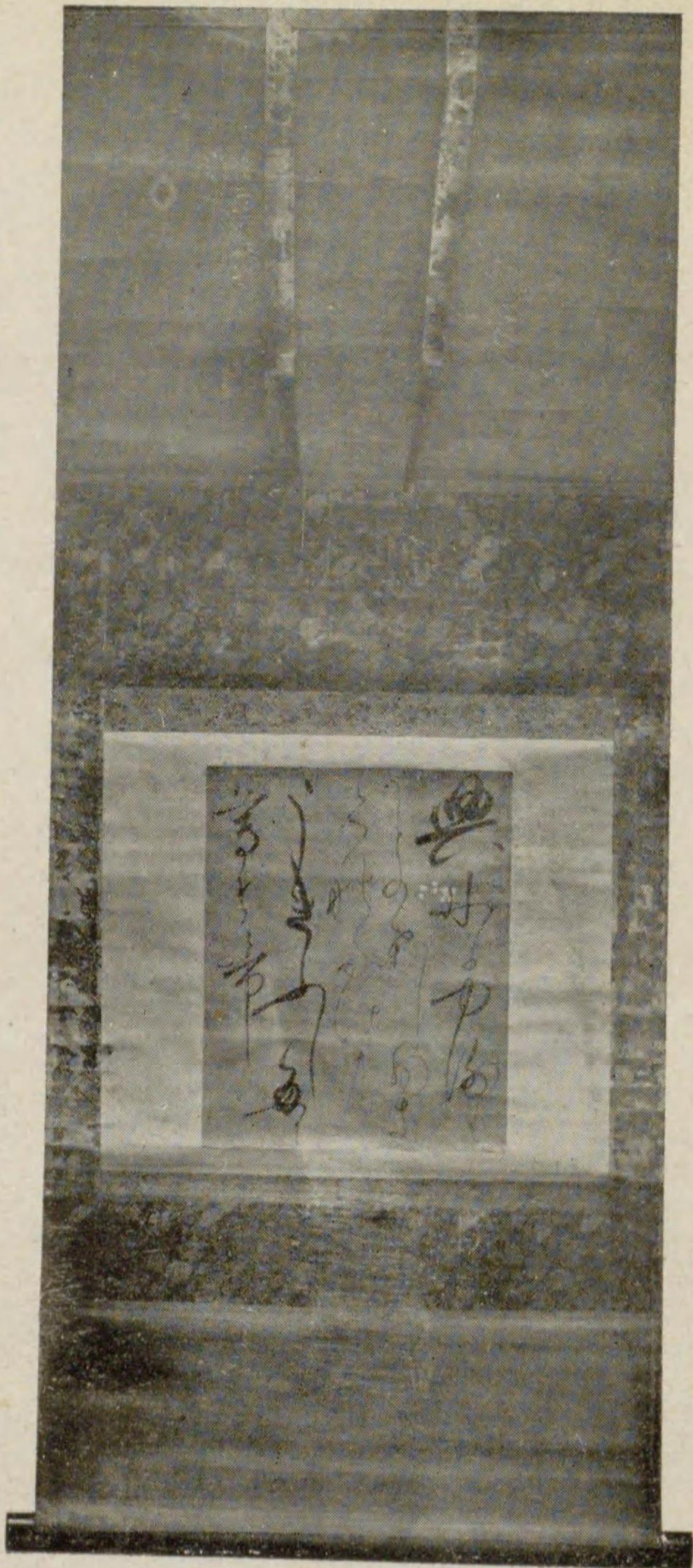
大正丁巳の春紀元節寧樂佐保の里に住める大聲草堂の主鳴門子祝砲の音を聞くや、やがて自から一盃を酌み、自から祝し、且歌て

里人の耳には入らじたほ聲は

なるごも知らぬ人もこそあれ。

かくなん物しけり

小野お通詠歌井眞蹟



## 小野阿通

おづうは實に萬能藝の御師匠様なり。詞藻に富み、材藝に長じ、琴碁書畫、歌謠文章、さては禮式作法、また茶湯香道花結等。當時所有高尚なる女子必要の藝道に於て、幾んど能くせざる者なかりしといふ。しかして彼女の生出たる時代は如何、室町氏の末期に屬し、戰國亂離の間に在りて、銃劍刀槍の音に和して孤々の聲を揚げ、四圍は銃劍刀槍もて包擁せられ、銃劍刀槍影裏に於て人と成れり。武風ふきすすみぬ、文の林は荒れにけり、詞花言葉の尋ぬべき跡寡なく、士人すら姓名を記すること能はざる者多く、武士が其妻女にいろはを習ひし珍談あるが如き、文運否塞の世に生出でたり。女子文藝教育などは、殆ど思ひも寄らざる時世なり。然るにかゝる多材多能の女性がゆくりなく女子文藝の暗黒界に明星となりて現れ出でたり、三百年間、文藝界を照耀せられたるも亦宜ならずや。抑々江戸時代より今日に至るまで三百年間、社會の好尚に適し、戯曲文藝界に於て、最勢力を有せるものは、果して何種の文字に屬すべきや。院本小説、雅頌俗謠、その種々雜多なること



數へ盡すべくもあらず。而して三百年間最盛に行はれて、今に至りて尙衰へざる者は、所謂淨瑠璃にあらずや。我が國民の性格を、最能く遺憾なく描出せる文字も、亦恐らくは淨瑠璃の右に出づるものなからむ。則吾人は、淨瑠璃を以て江戸文學院本小説界の中樞なりと評定するを憚からざる者なり。

さればこの三百年間盛行したる名譽ある淨瑠璃開山の月桂冠は、果して何人の頭に戴かしむべきか。吾人は、小野おづうといへる才女こそ、此名譽の冠を戴くべき人なりと信ずる者なり。然り、而して此淨瑠璃てふものは、お通以前、室町時代の末に於て既に創作せられて世に行はれ、江戸時代となり、お通新にこれを改作し、老も若も、男も女も、能く喜ばしめ、能く泣かしめ、能く怒らしめ、能く笑はしめ。雅にも俗にも、貴きにも賤きにも共に歡び迎へて聞くべからしめたり。これ今日に傳へて尙衰へず、ますます盛に行はるゝ所以ならむか。さればお通こそ淨瑠璃中興の開山と知られたり。

お通は、かゝる顯著なる事蹟あるに拘らず、その傳ふる所、諸説紛々誤謬も亦極めて多し。彼女を以て織田信長の側女と爲すものあり、豊臣秀吉の侍女と爲すものあり、而して共に時

代合ひ難し。又淀君宮仕の上臈と爲すものあり、新上東門院及東福門院の供奉の局となすものあり。又水戸の城主武田常陸介信吉の家臣小野和泉の女といふ者あり、門岡雜談望海每談等これなり、長澤の松平上野介康高老臣小野能登守が養女にて、實父は松平隱岐守定勝の家老長沼吉兵衛といふ者あり、長春隨筆等これなり。又小野宮實頼公の裔孫、小野正秀の女といふ者あり。史海等これなり。而して豊臣秀次の家臣鹽川志摩守の妻たりしといふに至りては、大抵みな一致せり、その多才多能といふ者も亦一致せり。かくてお通の傳記の數多き中に在て、最信すべきは、それ紫野の前大徳天祐叟紹果が、お通の女お伏に與へたる文書に如く者なし。この文書に據るに、お通の父は、小野正秀なり。かれは小野宮實頼公の裔にして、美濃國北方の庄を領せり。又お通が自から寫したる金葉集の末にも、美濃の國北方の里、小のまさ秀が娘小野つうと書せり、顧ふに、正秀美濃に在れば必信長に仕へしなるべし。然るに正秀は、六條河原の合戦に、一命を捨てたりといへり。當時信長未だ京師に向はざりしが、信長の京師に入るに及では、三好の黨既に敗走せり。故に正秀は、信長の爲に、將軍義昭に付屬して京師に在りて、この戦に死せしものならむ、時

に永祿二年なり。

(四)

お通は當時尙幼にして、木偶を弄ひて襤褸の中に在り、信長はその小野氏の遺孤を憐みて、左右に置かれしと見ゆ。然るに十四五年を経、天正十年夏の交、圖らず信長は、其臣明智光秀の爲に本能寺に弑せらるゝに及では、小野氏一家は、これが爲に亦復據り所を失ひ、一門流離浪浪の身となり、美濃を去て京に出で、母と共に室町松本町の片邊に、詔住居せりと「京のすさび」に見わたり。紫野の天祐叟紹果の書に、後一家一門、離父母國散在諸方也といへるもこれなり。

厥後お通は、京に在りて諸藝を學べる中に、歌文を九條禪閣(植通公)指導の下に修業せり。禪閣は當時公卿縉紳の柔弱なるに似ず、頗る硬骨にして博覽強記、羽柴秀吉既に明智光秀を誅し、藤原氏を冒して高官に上らむと期したりしが。禪閣奇異なる史論を唱へ、秀吉をして辟易せしめたるは、有名なる談なり。秀吉も遂に強硬なる反對に閉口して、豊臣の姓に甘んせさせたるが如き、碩果の概ある人物にて、此公公武の間に大に幅を利かせ、和歌の弟子も頗る多く、交際も亦極めて廣し。お通が將來宮中並に公卿また諸侯の間に交

際を廣くしたるは、全く九條禪閣の下に出入し、詩歌管絃の會にありしならむ歎。

かくてお通は、いつしか年頃にもなり、人の媒して勸むるまゝに、豊臣秀次の家臣鹽川志摩守に嫁したりしが、志摩は、或書には酒狂の癖ありともいひ、玉露證話には、お通は才智發明なるに、その夫鹽川は、さほごもなき故、恥辱のみ多かりしゆゑ、離別すとかやとあり。とにかく志摩が武骨極まりたる、其無學文盲なる、お通の文雅優美なる、その文野のたがひ、所謂月と鼈、千里の駿馬が奴隸人を乗せて馳するの觀あり、到底琴瑟和諧の家庭を作るに堪ふべしと思はれず、いつしかお通は鹽川家を去て、獨立獨行の身となれり。かくて文祿三年には、其師九條禪閣も薨去せられ、慶長三年には、豊太閤も薨去し。其五年には、關ヶ原戦争あり。此際天下の大小名は、東奔西走し、京畿に於て集合會盟したること幾回なるを知るべからず。其他これ等の便によりて、公家武家の往來宴飲等もあるべし、當時お通は、詩歌管絃書畫茶香の師匠として、はた、禮式作法に通ずるを以て、公卿または諸侯の會合に招聘せられ、年増の朧女として、其間を周旋奔走せり。戰國社會の交際場裏と雖も、能狂言、俳諧茶の湯、更に高尚なるものは、琴碁書畫、さては詩歌舞曲等

(五)

亦往々に嗜める武弁なしといはむや。お通は是等の高尚なる藝道に於て、何一つとして能くせざる事なし。家康の爛眼、確かにお通の手腕を此間に見抜き、やがて駿河に召して女中に作法を肄はしめたる由、慶長日件録並に古今秘録に徴して明かなり。お通は繪畫にも長し、殊に肖像を寫すに妙を得たりといふ。家康公七十二の時、お通二代將軍秀忠の命を奉じて、其肖像を畫く、現に芝増上寺の什寶となりて觀智國師の賛あり、又久能山にもありと傳ふ。おもふに駿府に聘せられ、女中達に作法教授の間なるべし。望海每談に、大御所様の御前へも、以前より度々罷出しより、尊影を書寫したきよし申上調たりとあるは、當時の事を謂へるなるべし。是より先き太閤秀吉公の肖像を寫し、今に京都高臺寺の什寶となれるよし。されば繪事も亦儘に彼女の營業の其一に居るものと知られたり。

秀忠の女千姫(天樹院)が、豊臣秀頼に入興するに當て、お通撰ばれて其介添となる、其介添に撰拔せられたるも、家康の鑑識に出でたる事と思惟せらる。其介添として大阪城に乗込みては、結婚の一事を完結したり、彼女は、當時琴碁書畫、詠歌文筆の師匠として、この職分をもつくしたるなるべし。彼女は、固より結婚の一事を完結せむが爲に、臨時に

傭はれたる臍女なり。彼女は、決して家康千姫の臣下となりしには非らず。其囑されし事結了の後は、依然獨立の御師匠様なり。

さて彼女大阪城に在りて、一日淀君お通を召して言はるゝやう、古への女の世にすぐれたる才藝ありしは、其徳を末世に残し置きしぞかし、されば伊勢は在中將の一生涯を記して伊勢物語とて、今の世までもてあそぶ。紫式部は、源氏六十帖を筆にまかせ、石山の觀音の化身なりと世に云傳たり。清少納言が枕草子、かれといひこれといひ、言葉の花にはやかに、心の水きよく久敷世々を流來れり。あはれ我御前ワゴゼも、才藝の程を、末世に残して、名のかたみともなし給へかすと所望ありければ、おづう返事に、古へのかきこきは、皆神や佛の化身にてまします故に、さやうの事を、後の世まで残し置かれ候へども、今つたなきわらはの及ぶべき事にあらず、さりながら、仰せも重ければ、よしあしには入江のもしほ草、かきあつめてさし上げときのお笑ひ草にもなし奉らむとて、遂に筆を執り、牛若丸と三州矢矧の宿の長者の女淨瑠璃御前と、戀愛の事を物し、淨瑠璃物語と號つけ、淀君にさし上げたれば。淀君御覽じて、さてさて言葉のつゞきさやかに、筆せい玉をのべたり、



今の世の伊勢か紫式部か、まことに小野のながれ程こそあれとて、御感あり云々と、江戸名所咄に見えたり。是に於て、淨瑠璃物語十二段草子に、新舊兩作ある事となれり。かくてやがて澤住檢校も、會々同じく城内に在りければ、淨瑠璃十二段に章節フシハカセを付け、始めて三味線に乗らしめ語り始めたり、これ三絃を弾き淨瑠璃を語る濫觴なり。これより淨瑠璃節なるもの、三味線と共に海内に行はれ、士大夫間にも、これを弄ぶ者あるに至り、爾來幾多の變遷を経て今日に至れり。

澤住檢校は、戸田左門一西の抱座頭にして、一西は、關ヶ原の役に於て、徳川秀忠に従ひ又秀忠が眞田昌幸を信州上田に攻むるに及びこれを諫め、家康これを聞きて大に感賞し、近江國に於て、三萬石を興へ、膳所に居らしめらる、蓋し其事凡て關ヶ原戦争以後の事に屬す。されば一西は豊臣家結婚御祝儀に付、澤住檢校を城中に差遣はし置きたると見たり。淨瑠璃の新作並に澤住の節付を以て、た通東福門院入内供奉の時に成ると記せる書あれど、吾人は敢て取らざるなり。

望海每談には、更に琴の組の十二組の歌の作者も、お通なりと記せども、同書の記事は、最信すべきもの多きも、此一段は、いまだ俄に受取り難し。たもふにお通の多能なるより後人遂に彼女に託せしならむ。

さてお通は、大阪城内に於て、手腕を揮て能力を顯はしたるを以て、更に一段の名譽を博する事となれり。そは時の天子後陽成の御母新上東門院は、お通の才學を愛でさせられて遂に之を賞ひ受け玉ひたり。望海每談に云、陽成院の女御新上東門院御入内の時、御賞ひに預り参りて供奉すと、その入内の時に供奉といふ事は信じ難し、年月合はざればなり。されど彼女が、後宮中に入り供奉したる事は、諸書に見えれば、疑ふべからず。同書に又云、其後御暇取りしかば、直に東福門院様へ相招かれて云々。新上東門院は、元和六年二月を以て薨じたまひ、同年六月東福門院入内ありたれば、お通は東福門院の介添として亦復た宮中に入り供奉したり。直に東福門院へ相招かれたりといふは、これを謂ふならん是所諸書に見えて、確かなる事實なり。徳川家に於ては、亦復この老練の人を以て、婚儀の事に従はしめたり、誠に其宜を得たりと謂ふべし。もと宮中の模様は、地下輩にては、容易に知れ難き所多ければなり。因てお通に徳川氏より年々金貳百兩七十人扶持を賜はる。

これも亦程なく辭職して、自由の身となりて、また元の御師匠様なり。是に由りて觀る時は、彼女は、宮中幕府の間のために、如何に重寶がられたかは推知せられたり。かくてお通は、其年齢を以て推すに、當時既に四十歳以後の女にして、徳川家康に鑑識せられ千姫の介添として、大阪城に乗込み、而して淀君等にも愛せられ、新上東門院にまで貫はれたる身分を以て、最早再醮すべき年齢とも思はれざれど、江戸名所咄に傳ふるが如く、ようがんにつくしく、若木に勝る見所ありてにや、將た所謂茶のみ友達の類か、渡瀬といへる一貴族とかたらひ、た伏といへる一女を設けたり。天祐叟紹果の書に、所謂一信女者通子嫁源氏渡瀬羽林之家所産之女也といへる是也、羽林とは、近衛の中將若しくは少將なり。た伏を以て鹽川志摩の女と爲す書多けれども、これ決してその實を得たるものならず、そは年齢に齟齬の點多ればなり。而してお通は一女を設けたりと雖も、嘗て渡瀬の姓を名乗りたる事は物に見えず、やはり何處までも獨立の體にて、小野お通を以てた伏は小野家の子として養育せられたり、この女も、亦父は良種にして母は才女なれば、母に次での才學あり、後眞田信政のたもひものと爲れり。

當時關東と大阪との間に、平和は破裂し、豊臣氏は終に亡びたり。蓋しお通と眞田信之との間の交際は、關ヶ原以後、大阪冬夏兩陣の間に於て親密を加へたるものたる事を認む。そは眞田氏は武田氏の臣にして、數々京畿に往來せしものにあらず、信之の京畿に赴きしは蓋し關ヶ原戦争と大阪の兩役となり。而して此の兩役に於て、信之の地位は、お通と酷だ相似たるものあり。信之に在りては、其父昌幸と其弟幸村は大阪に屬し、而して自身は情義より關東に屬し、一身を以て兩者の板挾となりし者なり。……………信之幼にして徳川氏に入質と爲りその恩顧を受く……………而してお通に在りては、徳川氏の恩顧に感ずると同時に、豊臣家の優遇を懷はずんばあらず。信之に於ては、關ヶ原の戦争後、死を以て其父昌幸並に弟幸村の死を救へり。然るに大阪陣に於ては、幸村は終に戦死せり。お通に於ては、その仕へたる淀君秀頼は共に自殺し、剩へ千姫は關東に引戻されたり……………一旦上州徳川村徳満寺に入り尼となり、後本多家へ再嫁せり……………これ皆涙の種ならずや。信之は天命の慘刻なるを歎せしなるべし。お通は豊臣氏の憐むべき悼みしなるべし。兩人の事情相同じ、殆んど一種の淨瑠璃ならずや、其の談亦相熟せざらむや、是れ當時關東方

として、大阪に赴きたる大名多きそが中に、特別に眞田氏と小野氏との交際を發せし所以ならざるべからざる也、果してその證左あり、信之がお通に贈りたる書に曰く、

たより候まゝ、一筆申候。其後ちそくさいにて候や、われらも、いまだ命ながらへ申候、さてくわれく事、この度國がへのやうなる事にあい申、いまほごは川中島松城……松代……と申所に移りぬ申候。あまり都あたりにも、わとり候まじく候。ここもと、名所多き所にて候。まづくあかしの松、くらしなの里、いにしへ西行がくちすさみ候と申候、信濃なる明石の松のありながらなご倉しなの里といふらむ。其外、のきばに近きおばすて山、さらしなの月、田毎の月、きりに花咲、井の上の、山も雪氣の雲はれて、しづかにいづる朝日山、三國一の善光寺、ふれごも積らぬあわ雪の、あさのと申す里くも、皆くわれら領分にて候。さてもかうけん殿うきよに候は、御なくさみながら、そもじ様なごも、少御くだり候へとも申候はむに。……かうけん殿は(蓋お通の良人渡瀬氏なるべし)……さてもかやうになりはてたる世の中、いにしへ存じつゞけ、我と等しき人なければ、朝夕なみだばかりにて候。もはや、國もかうりもそこからもしろく候はず、御すもじ候て、あはれとせめてねばしめし候て給はるべく候。申たき事山々候へごも、筆にのこし申候。かしく。

霜月十八日

さな田いづのかみ

おづう殿 まゐる

尙々、そもじ様は、いにしへわれらを御覽じ候御心有御人さまにて候まゝ、心のまゝ申候て、御はづかしさにて候。もはや、うきよいらぬとぞんじ候へごも、子どものためとぞんじ、露の命のきぬぬほごゝて、世を渡るあさけのけふり心細さ、御たしはかり候て下され候べく候。又申候、こゝもと、あまり人もなく候まゝ、つかいものごも(妾)ちとくだしたきと申候へば、そもじさま御きもいり候よし、かたじけなく候、御きもいり候て二三人くだし給はるべく候。きにいらす候はば。又のほせ可申候。下候は、むざとしたる事申候はぬやうにたのみ申候。いかに都の人にて候ともうつけ者はいやにて候。又見さまあしきもいやにて候、われくつかひものにも見ぐるしきは、外聞あしく候。とかくそもじさま御らん候は、ぬるくとしたる人にては、あるまじきとぞんじ候。

とかく道硯と申ものゝ所へくはしく申候。此ふみ火へ御いれくだされ候べく候。むだか  
きちらし申し候。おかしさくにて候、かしく。

右古文書は、信州松代にて眞田家一門某が所藏に係る。此書に由て、當時眞田信之と小野  
お通との交際の様子もほの見ゆ、尙々追而書に因てお通が身の上の地位、さては當時大名  
の家庭、京師の風俗等も推知するに難からず。お通を稱して、そもじと云ひ、又そもじ様  
は、いにしへわれらをも御覽じ候御心有人さまにて候まゝ、心のまゝ申して候なごいへるを  
見るに、決して最早宮中の官女若しくは武將の御殿女中に對する語にあらず。ましてや、  
婢妾の周旋を之に依頼し、いかに都の人にて候とも、うつけものはいやにて候。又あしき  
もいやにて候なごいへるに於ておや。思ふに當時の武家は、近衛兵衛等の都雅なる武官と  
異なりて、むくつけき田舎漢の成上り、大小名の家庭と雖とも、その野卑なる事はいはず  
もがな、其夫人といひ妻室といふも、多くは當時の習ひとて、政略結婚に成り、互に武家  
同士の縁組なれば、田舎育ちの藪鶯、ホー法華經も訛言交りとやら、其の家格にふさはし  
からぬ事は想像するに堪へたり。世は既に偃武修文の社會と一變し、自から優美高尚を要

求する時運に向ひぬ。田舎娘のみにては、家の體面上にもかゝはるわけ、交際上に亦も自  
から差支ゆる道理なり。是に於て、孰方の大小名にも、京女郎の優美都雅なる、威儀作法  
に爛へる、舞踏音曲も能くし、筆札等にも長し、容姿見にくからず、氣の利きたる女子を聘  
し一には交際上の用に供し、一には娛樂の友とせり。やがて京の方にては、この要求を充す  
る必要を生じ、自から夫々の教育を施さざるを得ず、需要ありてこそ供給も起るなれ、經  
濟學の原則とやら、従つてみめよきものは教育必しも要せず、容色揚がらざる者は、諸藝  
を仕込まれ、或は祐筆に召さるゝもあれば、或は鳴物で聘せらるゝもあり、或は舞踏で上  
るもあれば、或は禮式作法で出づるもあり、さては茶儀香道を以て勤むるもあり。京女郎  
の品拂底を來さむばかりなり。さればにや釋怡溪の著續人名女中の卷にも、一、京都など  
にて娘持たるかたく、御大名様方へ御奉公にさし上む心がけにて、三味線の舞のご、藝  
をならはするたぐひあまたおはしました候。これも舞子と名付、此道の指南を渡世とす……  
俗の藝者……多くの人の娘を引請け、藝を教ふる事にて候。江戸などにも、をりふし有之候  
げに候云々。こは貞享元祿頃の情況を記せるものなれど、その前々の事は推して知るべし。

お通は、當時是等一切の女子教育を爲し、兼て其卒業生を諸國諸大名に周旋せるものにて今時ならば、私立女學校の校長兼教員なり、而してその宮中並に幕府に出入して重用せられたるに至ては、今時這種の女傑は見出すこと能はざるなり。

さる程に眞田伊豆守信之の家督内記信政は、寛永三年二條行幸の節、御上洛（將軍家光）の供奉して、上京の折から、彼お通の女とかたらひ男子を生じ、これ後年召出されて眞田勘解由信景と號す、今眞田伊豆守幸通の庶兄也、祖母お通は、後に江戸に出で、春日局と懇意に付て、春日局の執成にて、稻葉美濃守正則執成にて被召出、三千石を勘解由に被下たり。此男は、今の出羽守信弘也と玉露證話に見わたり。お通の才、斯る事も有り得べき事柄なり、かくてお伏は、内記の子を設けしも内記の存生中には、江戸へは來らざる様子にて、矢張京に在りて、母同様の業を營みしが、後年に至り江戸にきたり、春日局の盡力にて尾州家御廉中へ音楽を教へたりといふ。お伏は夙に入道して、天宗鑑尼と稱せし由なれど、強ち世捨人となりたりとも見えず、江戸に來りて後は、淨閑尼と號し江戸に死せり。世に二代目お通と稱するは、これを謂ふ也。江戸名家墓所一覽に、根岸新屋敷の邊に小野

お通淨閑尼の墓ありと記せるは即ちお伏の事也。さてお通が詠めりと傳へらるゝ、

姥捨の山には入らじ名をきゝて車をかへす人もこそあれ。

といへる歌は、史記に號三縣勝母一而曾子不入。名三邑朝奇。墨子回車とある心を詠めるなるが、橘泰が「筆のすさび」には、お通の女眞田河内守の妾となりて、信州松代へゆきし後に、おづうを手許にて孝養仕たしとて、迎の人を登しおづうを松代へ引取る。おづう松代へ下る路にて、姥捨山の近きあたりを通りけるに、迎の従者ごもいふには、これよりわづか七八丁ばかり廻り道すれば、姥捨山を通り可申候、名所の事ゆゑ、御覽被成候はゞ廻り申べく哉といふに、おづう承知せず、廻り道はやめて、山へはゆかずしてけり、その時おづうが詠める歌なりといひ、近時には心がけのよき婦人なりと稱贊せるも。此歌はお通の詠にあらず。又史海にも、此詠を以て、信之の書中に、信州に來ることを誘ひしが故に、之を辭して姥捨の山には入らじといひし也、其の志操の高尙なる諸侯と雖ごも致すべからざるものならずやと贊嘆しつれど、これ亦違へり。此歌は丸龜の才媛井上通女の詠にして、和歌往事集羈旅の部に出づ、聲曲類纂に曰く日尾荆山先生の藏に、感通女詩と題せ

る草子あり、姥捨山の月かきたる屏風を見て、是はいづくの山ならむと、人の問ひたる返しに、ふと勝母の里の事を思ひ出でられて、おぼすての山とは云々。享保五年の冬、井上感通女行年六十九歳の時のすさびなり、されば橘泰が説かれこれ混じまじへたりと覺しとも見わたり。小野お通と井上通女と、共に才學世に名高く、同名の爲め混せし例多し久川鞞負の女學範に、處女賦及び和歌往事集を以て小野お通の作也とす、是亦井上通女の作を取違へたるなり。

されどお通が、文筆に長じたる事は、勿論にて、淨瑠璃物語はいふまでもなし、彼女が其侍女千代といへる女、京の或商人に嫁ぎし後、詫び住ひまゝならぬ事多く、夫婦の間、かたみ怨むるふしくも出来て、ねにしもたねはてなむとす、千代このよしを歎きける文の端に、

たねはつるものとは見つゝさゝかにのいとまたのめる心ぼそさよ。

といへる古歌を書添てやりける。お通あはれに覺て、かの男への文に、

久しくよすがなく、おどづれきかまほしき折から、千代かたより、あらましの事ども、

文して聞ね侍ふに、さゝかにの糸たねはつるものとは見つゝと、ふることなごくれくれ歎きこしむらふまゝに、このかへりごとに、

どにかくにをりふしごとのたがひめを恨むる中ぞちきりなりける。

とまうし遣し候。さなきだに、女は心あさくし、何くれの事を、せばき胸にたもちさむらへば、をここにすさめられがちにて侍らむすれども、もとの清水わすれがたき御心をわれしもたのみ入候。所がらの御住居、夕がほの垣ねもまばらに、人めもつらくおほしめしさむらはば、東山ゆうくわん房へ御たより候はば、よろしくはからひ申さるべく候法師は取つきあらしく候へども、底意なくて、山の井をむすびわけてもあしからずはからひたまひ候へかし。折から所々のさわがしさ、うへにも御けしきおだやかならずつきくの人も心ならず候ゆる、うれしき便までに、あらまししごけなう候、かしく。

此文にて、男もなぐさみてわかれず、五年ほごへけるが、男身まかり、岐阜もとりくになりて、世のさまかはりしかば、此女氣そゝろになりて、此文を首にかけて、淫かれあるきける、是文展狂女といひ傳へし女也。お通の心ばへ文雅の其代にも似ざるがめでたく覺

わて、近世の例にはやゝふるびたれごころに録す、と崎人傳に見たり。

お通の能書なりし事。彼女が能書たる事は諸の書に出で、江戸名所咄には、殊更手跡は、聖武の女帝（光明皇后）も同じ世にだにましまさばはぢおぼしめす程やと評され。長春隨筆には、お通文學に達し、能書世に鳴る、人これを褒稱す、萬藝に志し、甚秀才なりとあり。玉露證話には、女徳あつて能書材藝多し。女にはめつらしき人やと見たり。諸和氣姥櫻には、筆取て物かく事は、澤田のお吉、小のゝおづうにもまさり云々三百年來世々書畫鑑定家の古筆了仲の著作扶桑畫人傳にも、多藝なりしが、殊更能書の聞ありて、當時その手跡を學ぶ人多しと記されたり。其他の書に、彼女が能書なりし事記せるもの、擧げて數ふべからず、手跡のすぐれたること知るべし。此中余お通の一幅を獲たり、卷首に掲げたる即是なり。

繪の事。繪畫は殊に人物肖像を畫くに長じたり。江戸名所咄に、ようがんにつくしく、ゑがき、花むすびえい歌糸竹のわざも世にすぐれ云々、扶畫桑人傳に、又畫をよくし、常に天神の像を畫く、設色の畫に至りては鹿ならずして、上工の業とやいはむ、人物多くして花鳥

少なし。又云二代目通女、手跡初代を學ぶ、中頃近衛信尹公の書風に變じて、天神又人丸の自畫贊あり、皆墨畫なりと、これはお伏の事をいへる也、前に述べたる如く、秀吉家康兩人の肖像といひ、又余の實見せし所にては、聲曲類纂に載する所の美人畫像の縮寫せるもの、清水晴風秘藏の天神影像等なるが、其筆如何にも穩健にして、優美也、確かに専門家の伎倆を供へ、只この一技を以てしても尙能く獨立するに足るものあり。

糸竹。音樂に堪能なりし由も諸書に出づ、されど後世の琴三味線の如きものにはあらず、即ち管絃の樂なり。箏のこと及び琵琶等に長せしといへり。

あはれ、お通の生涯は、頗る多事に終りたり。その生るゝや、戰國亂離の際にして、襁褓の中に在りて、既に孤兒となり、漸く長ずるに及ては、主人を失ひ、既に人と成りて嫁するや、また良縁ならず、離別の已むを得ざるに至り。老後の杖と頼める茶飲友達に先きたられ。只一人の女、是亦不如意の事多く、果して史海子の説く所の如くならしめは、三十四五歳にして剃髮して、浮世のはかなきを觀じたり、彼といひ此れといひ、皆涙の種ならざるはなし、若それ尋常の婦人ならしめば、夙にヒステリーを起して神經衰弱に陥り身も世

もあらぬ思ひをなすべし。

然るに彼女は、天下の諸侯、各其封疆を固守して、輒く相往來せず、交通極めて不便なる時に當りて、或は駿河に下りて駿府城内に數多の女房達の教授に従事し、或は千姫の介添を依頼されては、大阪城内に乗込み、結婚の一事を完結し、淀君の請あれば、筆を揮つて淨瑠璃物語を大成し。或は新上東門院に貫ひ受けられ、宮中に入りては、御局の役をも勤め、或は秀忠の請に應じて、東福門院入内に供奉して宮廷の大儀に與りぬ。然れども彼女が自ら進で求めたるにあらず、故にその事止めば、彼女は直に自由不羈の身となりしなり。既に自由不羈の身たり、故に能く自由自在にして諸方の請に應ずるを得たり。多年宮中並に幕府大奥に出入して重用せられ、多事の世に處して能く獨立獨行す、女丈夫にあらずんば孰れか之を能くせむ、寛永八年享年、六十四を以て世を去りぬ、彼女が、末年長柄の里に退きし後、

つれくどふりにしあどを思ふにも袖こそぬるれさみだれの空。

と詠みいでたり。來し方ゆく末を思ひつゞけ、感慨の情轉々堪へざるの跡みゆ。又嘗て

世にふれはことの葉しけき吳竹のうきふしことに鶯を啼。

とも詠み出でたる、何そまた沈痛悲哀なる。彼女の六十四年間の生涯は、いかに多難なりしかを推しはかられぬ。噫。



186  
199

いよ／＼御無事めでたく存上げ参らせ候さてとや  
素懋志様そのかみ野老の山乃井の浅き女子教育史の講義を  
寧樂の井戸の深き御心もて御聴取下されたる御方々の御堂  
人と存じこたみ此書を覆揚して御目につけ参らせ候月雪花  
の折にふれ同臭の御友垣と來し方往くすゑのかん取々の御  
物語りのお笑草の御種とも相成候はいかばかりかお嬉し  
く存じ上げ参らせ候あら／＼めでたくかしこ

大正六丁巳春二月堂御水取半の日佐保河の上にて

大佛頂面六甲野老

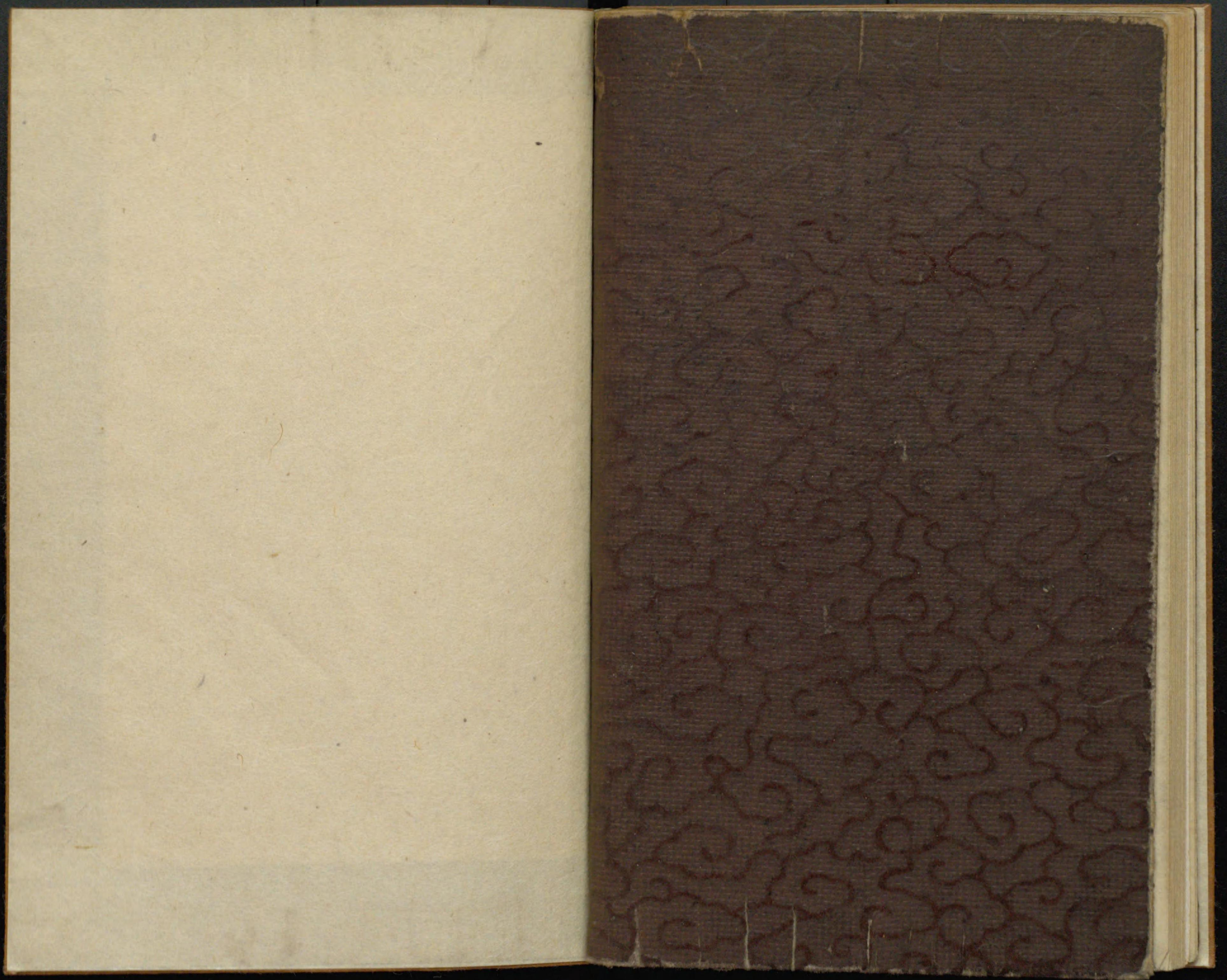
殿

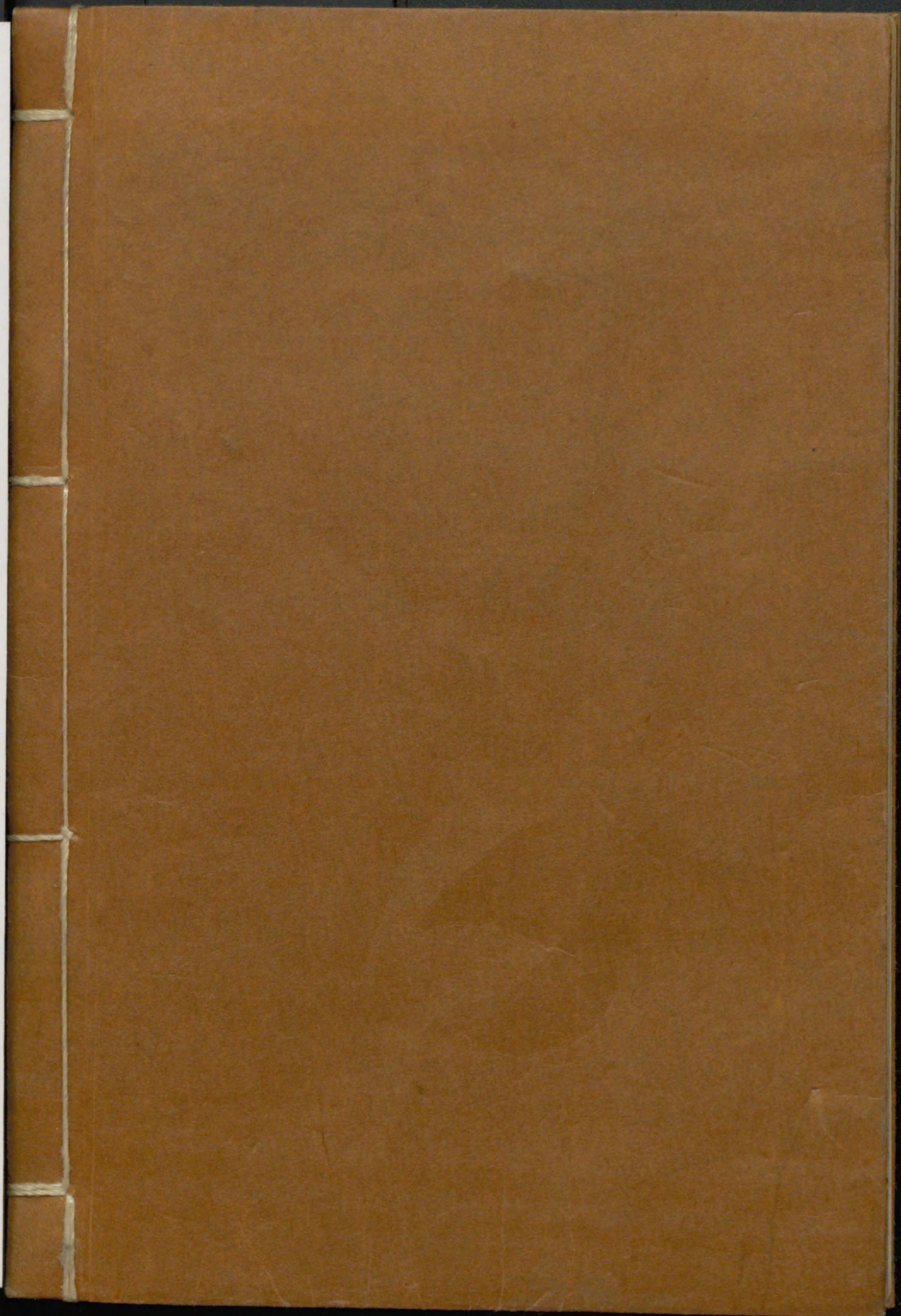
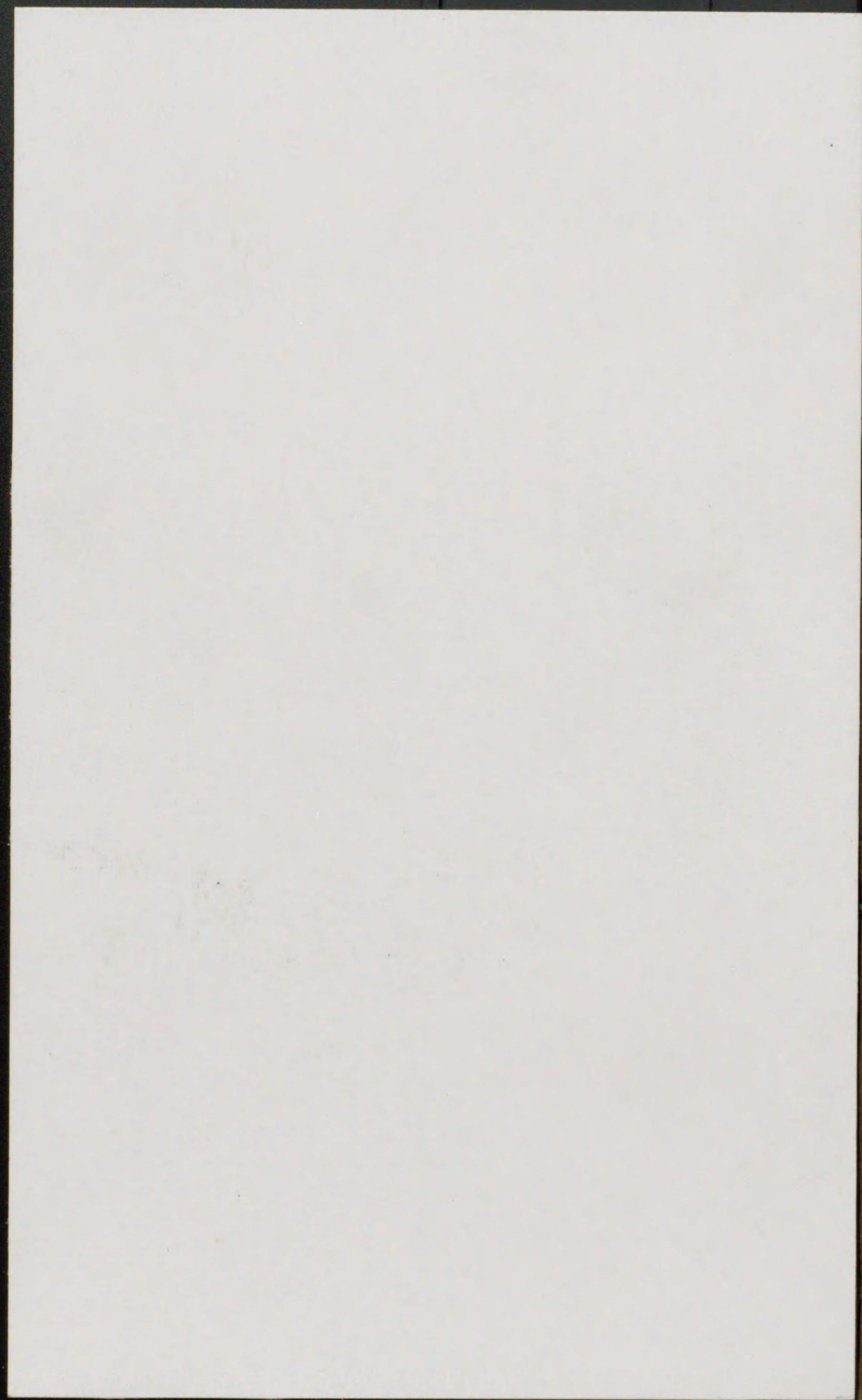
申たまへ

追而御一讀給はり候上何なりとも思食の程を本書の餘白  
へ御書入れあらまほしく候

敬空





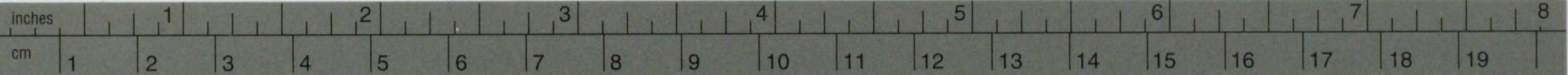


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

